

資料室だより 132

トゥルヌミールの「神秘のオルガン」“L’Orgue mystique”を2年かけて全巻揃えました。シャルル・トゥルヌミール Tournemire, Charles(1870-1939)は1870年フランスのボルドーに生まれ、ボルドー音楽院で学び、16歳でパリ・コンセルヴァトワールに入学します。91年、ヴィドールのオルガンクラスでプルミエ・プリを獲得。実際的なオルガンのテクニックはヴィドールに学びますが、音楽そのものに関してはヴィドールの後継者ではありませんでした。彼は半世紀前の巨匠セザール・フランク Franck, César(1822-1890)から多くを得ています。

トゥルヌミールの“L’Orgue mystique”は「神秘的オルガン」と訳されていますがオルガンという楽器が神秘的なのではなく神秘中の神秘がオルガンを通して現れ出ると私は解釈しています。カトリックの1年の典礼暦に従い253曲(51分冊)という途方もない量のモニュメンタルな作品“L’Orgue mystique”に取り組んだ彼はグレゴリオ聖歌と典礼との一致をオルガン演奏に求めました。覆われた神秘を露わにするのがオルガンの役目であり、その意味でL’Orgue mystiqueです。

彼は体内を巡り、命を活かす血液の役割をグレゴリオ聖歌に求めます。グレゴリオ聖歌の旋律の持つ柔軟性と旋法性から出発したファンタジーの展開は、シンプルなものと同時に複雑なテクスチュアを織りなす様相を示しています。彼のこの作品においては300以上のグレゴリオ聖歌が引用されています。

セザール・フランクからオリヴィエ・メシアンにいたるフランスの100年ほどのオルガン音楽史を概観するとそこに流れているのは深いカトリシズムの伝統、言い換えればすなわちグレゴリオ聖歌の霊性です。1000年を超えるカトリックの遺産が作品の隅々に活ける泉の役割を果たし、作品を支えています。それらは芸術作品としてと同時に典礼そのものとしても生きています。グレゴリオ聖歌のフランス的伝統、ということのみならず「カトリック教会音楽史」という一つの線に貫かれている印象を私は持ちます。これはフランスならではの現象と言えるのではないのでしょうか。例えば巨匠メシアンも、トゥルヌミールも最晩年にアッシジの聖フランシスコを題材とするオペラを残しています。トゥルヌミール最後の作品となったのは“*Il poverello di Assisi, op 73*”(アッシジの貧者)です。長く忘れ去られていた13世紀の聖人フランシスコの再評価がポール・サバティエによって始まったまさにその時代に音楽家として生きていた彼はカトリシズムの神髄といってもよいアッシジの聖フランシスコを音楽化しようとしていたことは注目に値します。また1916年の円熟期にはオーケストラを伴う合唱曲*St François d’Assise op 52*(アッシジの聖フランシスコ)を作曲しています。このようにカトリシズムの潮流のなかにおける作曲家の霊性を知っておくことも肝要と思います。

(杉本ゆり 記)